

伊勢原巡検

三浦裕美

徽音祭が1週間後に迫るあわただしさの中、式先生指導のもと伊勢原での巡検が実施された。地形図の判読とクリノメーターの使い方を身につけるという自然地理学的課題、大山信仰と近世市場町として栄えた伊勢原を辿るという歴史地理学的課題などが主として我々に課せられた。

伊勢原市の2万5千分の1の地図を片手に各要素所で位置を確認するのだが、即座に答が出せず地図上をうろうろしたり、見当違いな位置を示したり、一見簡単そうなことも容易ではなかった。また、実際の地形がすべて地図上に表わされているわけではない、というフィールドスタディならではの発見もあった。

今回は場所柄から、歴史地理の色合いの濃い巡検となった。伊勢原駅前は今では平均的地方小都市の雰囲気漂わせているが、茶加藤家などの老舗と狭い間口と長い奥行きで短冊状に区画されている町屋割に昔を残していた。太田道灌の跡を尋ね峰岸、山王原、粕屋を経、さらにバスに乗って

大山まで登る。先導師何某という看板を掲げる宿坊が軒を並べる。日曜日ということもあり、観光客や参拝客が行き交い、今でも大山信仰が人々の間に息づいていることを知らされる。

さて、歴史を辿り行きつく先は現在、そして今後の伊勢原である。以前は工芸作物や養蚕を中心にした農業が行われていたが、果樹・園芸・酪農等利潤の多い農業に移っているという。新宿から1時間で緑も多く残っているという恵まれた環境にあり、ベッドタウンとしても栄えている。地元民と新しい住民との混住社会においてどこにポイントを置いた市政を行うかというのが今後の伊勢原の大きな課題になるという。

巡検を遠足の延長上のものぐらいに思っていたのだが、詳しい準備が要求され、また新しく重要な発見も得られるものだということを学んだ有意義な秋の一日であった。

(10月31日 式教官指導)

行徳巡検

森 恵子

私達一年生の三回目の巡検地は千葉県市川市行徳で、栗原尚子先生指導の下、三回の中では一番事前学習の多い巡検であった。

地下鉄東西線行徳駅に九時半集合であったが、遅刻者がかなりいて、駅を出発したのは十時近くとなっていた。先ず、南東の埋立地へと向かう。駅の近くの不動産屋でチラシを数枚もらう。付近には中高層マンションがポツンポツンと立ち並び、不動産屋も多い。まっすぐで広い道路はまさしく埋立地か新興住宅街の感を与える。まもなく千鳥町の埋立地へつながっている橋に出た。右手には新浜御旗場があり、葦が生えている。この辺が元

来の海岸線で、御旗場が行徳海岸の原風景であると先生が説明された。塩田の話、土地利用の変化や埋立地の工業誘致、市川市合併のいきさつなど、海からの風がピューピュー冷たく吹く中で先生のお話を聞く。かつての海岸線ギリギリにマンションが建っており、一階は道路より2m近く低い。地盤調査の報告書が不動産業者の圧力で公表されないままになっているそうだが、実際住民が自分の家の地盤状態を知ったら、夜もおちおち眠れないだろう。

元の海岸線沿いに北東方向へ歩いて行く。建売住宅・アパート・マンションが混在し、もう農業

用地にならず、ただ投機を待っているだけの空地がその間を埋める。このような状況を社会的休閒現象と呼ぶらしいが、歩いていておもしろ味がない。東西線の高架線をくぐって旧市街に入った途端、街並みがぐんと古くなり、親しみが湧く。旧成田街道を横切り、旧江戸川の堤防に出る。旧市街の地盤沈下のため、堤防がずいぶん高い。昇って水面と集落の地盤高を比較しても、集落の方がやや高い程度というところであった。

かつての行徳船場跡にある常夜燈の大燈籠を見てから、行徳駅に戻り、昼食をとった。その後旧街道に向かう道の脇に、10数m四方の汚水だめのような場所をみつけた。通りがかったおじいさんに聞いてみたら、去年の台風で汚水が流れ込むまでは蓮田だったと言う。結局、蓮田は全て消滅してしまったようで、見る事が出来なかった。

江戸時代、非常の際に江戸への侵入を阻止するために設けられた鉤型の屈折の見られる旧成田街道を香取の方へ進む。香取にある源心寺は歴史の古い由緒あるお寺なのだが、最近では地盤沈下で有名となった。なにしろ墓地が1m以上も沈下し、大半の墓石が水没してしまったのである。その後盛土をし、嵩上げをしたようだが、今でも頭をのぞかせているだけの墓石が残っていた。詣り墓ではあっても、ホトケさんが浮かばれないとはこの事だろう。

行徳駅に戻ってきた時は未だ早かったので、希望者は先生と新浜御猟場へ野鳥の観察に行った。

近世に発達した旧市街と、戦後、特に高度経済成長期に急速に発展した新市街との対照がひどく印象に残った巡検であった。

(11月28日 栗原教官指導)